

死者たちの「革命」
——ジャン・ジュネのパレスチナ

魚住洋一

ジャン・ジュネの絶筆、『恋する虜』は、ブラック・パンサーやパレスチナ人の闘いへの関わりの中からは生まれた。かつては獄中でエロティックな「夢」を紡ぎ出していた彼、捨て子、乞食、泥棒、おかま、男娼としてのおのれの汚穢の中、その汚穢を豪奢さに転じて歌い上げるイマージュの数々を生み出していた彼が、ここでは、「夢」ではない「現実」、ブラック・パンサーとパレスチナ人という二つの革命運動の「現実」に向かい合おうとする。難民キャンプ、シャティーラの虐殺直後、現地に入った彼は、あるインタビューで、「監獄では、私は想像力の主人だったが、今は縛られ繋がれた男たちを見た、指を切られた女を見た、と言うしかない、私は見たものの主人ではない」と語る。サルトルのいう「回転装置」によって現実を脱現実化し、仮象の戯れに変貌させてきたかつての詩人ジュネは、パレスチナ抵抗運動や黒人解放運動の政治的「現実」にいかに関わり合ったのだろうか。——もちろん、それは「言葉」を介してである。しかし、言葉は、現実をイマージュのヴェールで覆い隠すものではないのか。彼は、このテキストの冒頭で、パレスチナ革命の現実は「この現実が消えていくために書かれた言葉のなかにではなく」、「言葉のあいだに」身を縮めている、と書いていた。私はここで、ジュネのこのテキストにおける現実とイマージュの錯綜した関係について考えたい。

『恋する虜』の冒頭には、彼が死の前日に書き残した言葉が記されている。——「言葉のありとあらゆるイマージュをかくまってこれを使うこと、なぜならこれらのイマージュは砂漠にあり、そこに探しに行かねばならないから」。このテキストは、「回想」と名づけられ、彼がパンサーやパレスチナの戦士たちのかたわらで過ごした日々の記憶、その記憶の「砂漠」の中からは探り当てたイマージュの乱舞によって織りなされている。「夢のイマージュの論理」にしたがって、時空を超えて突如場面が入れ替わり、現実か幻想かが攪乱されていくその叙述の流れは、『花のノートルダム』以来のお馴染みのものである。——ここに登場する戦士たちの多くはすでに死者となった者たちだ。ジュネは、「〈パレスチナ革命〉という言葉が発せられると、濃密な暗闇が覆いかぶさってくる」が、同時に、「彩り豊かな光り輝くイマージュが互いに追い立て合いながら動いていく」と述べる。このテキストはそうした「現われては消え失せる亡霊たち」のイマージュに満ちている。彼はある箇所ですべて古代ローマの葬列に言及し、「死者を生き返らせ再び死なせる」吊いの物真似師について語っていたが、ここで彼はまさにそうした物真似師の役割を果たそうとするかのようである。『恋する虜』は、死者たちへのレクイエムとして書かれたのか。彼は、戦士たちの姿の「美」について随所で語り、あたかもアキレウスの武勲を言祝ぐホメロスに自らを擬しているようにも見える。しかし、死者たちを嘉する言葉の数々によって、「言葉の間に」身を縮めていた「現実」は掻き消されてしまうのではないか。ベンヤミンならば、これを「政治の美学化」と呼んだのではないか。——ただ、そう決めつけるのは早急にすぎよう。ジュネにとってパレスチナ革命の「現実」とは何だったか、そのことを『恋する虜』というこのテキストに即しながら、ここであらためて考えたい。